

地域の児童館を利用している子どもの社会性に関する調査研究

—A市とB市の児童館を利用している子どもの利用者評価に関する調査より—

○ 福山市立大学（名誉教授）八重樫 牧子（会員番号：001335）

井上 信次（新見公立大学・007984）、直島 克樹（川崎医療福祉大学・006815）、泉 宗孝（新見公立大学・005363）

キーワード3つ：児童館・社会性・利用者評価

### 1. 研究目的

児童館は、児童福祉法成立以来、すべての子どもの育ち（健全育成）を保障し、子育て家庭を支援してきた。今後も、児童館は地域の子育ち・子育て支援の居場所の一つとして重要な役割が期待されている。筆者らは地域の特性を活かした児童館の子育ち・子育て支援のためのソーシャルワーク実践モデルを開発するために実証的研究を実施している<sup>1)</sup>。本発表では、この実証的研究の一つとして実施したA市とB市の児童館を利用している子どもの利用者評価に関する調査から、児童館の利用が子どもの社会性等に与える要因について明らかにしたい。

### 2. 研究の視点および方法

児童館の地域の特性を検討するために、A市とB市の児童館を利用している子ども（主に小学3年生～6年生）を対象に質問紙調査を実施する。児童館の利用者評価を行うために、満足度や児童館利用効果（子どもの社会性）に与える要因について検討する。児童館の職員に対し、配慮を必要とする子どもへの適切な対応が求められているので、児童館の相談機能についても検討を行う。2007年にB市において同様の調査を実施したので比較検討を行う。(1) 調査対象：A市とB市の児童館を利用している子ども860人（有効回答数289人、有効回答率33.6%）。A市には23か所の児童館（児童センター含む）、B市には6か所の児童館（児童センター含む）がある。(2) 調査期間・調査方法：2022年9月～10月に郵送法による質問紙調査を実施した。(3) 調査内容：①児童の属性：年齢、性別、学年、地区など、②遊びの状況：遊ぶ人数、遊び場、遊びの種類、外遊びが好きかなど、③児童館等の利用状況：児童館利用頻度、放課後児童クラブ利用頻度、相談など、④社会性等に関する項目：満足度、児童館利用効果（子どもの社会性）、不安など。(4) 分析方法：児童館利用頻度と属性・遊びの状況・相談の関連性を検討するためにクロス集計によるカイ2乗検定（残差分析）を行った。点数化した社会性等に関する項目（満足度、協調性と創造性の社会性<sup>2)</sup>、不安）については、シャピロ・ウィルク検定を行った結果、いずれも正規分布をしていなかったため、属性・遊びの状況・児童館等の利用状況との関連性を検討するためにMann-Whitney検定やKruskal-Wallisの検定を行った。協調性を従属変数とする重回帰分析も行った。分析にはIBM SPSS Statistics version29、SPSS Exact Testsを使用した。

### 3. 倫理的配慮

質問調査用紙に調査協力有無の質問項目を設け、協力すると回答した人を本調査に同意を得たものとした。調査は無記名式で実施し、結果の集計はすべて統計的に処理し、個人が特定されることのないよう個人情報の保護を遵守した。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。本研究は、新見公立大学研究倫理審委員会の承認を得ている(承認番号197)。

#### 4. 研究結果

(1) 対象者の主な属性：対象者 289 人の平均年齢(±標準偏差)は 9.89 (±1.22) 歳であった。家族形態については核家族 71.3%、三世代家族 12.8%、ひとり親家族(ひとり親三世代家族含む) 13.5%であり、地域差はなかった。(2) 児童館利用頻度と性別・学年・地区・遊ぶ人数・外遊び・相談の関連性：性別・学年・地区・遊ぶ人数・外遊び・相談と、児童館利用頻度の高い群(1週間に1回以上)と低い群(2週間に1回以下の群)のクロス集計(カイ2乗検定)の結果、地区と遊ぶ人数について有意差が認められ、B市よりA市、2~4人の遊ぶ人数より5人以上の遊ぶ人数の方が、1%の水準で児童館利用頻度が高くなっていた。(3) 満足度・社会性(協調性と創造性)・不安との関連：満足度については高学年より低学年( $p < 0.05$ )、A市よりB市( $p < 0.01$ )の満足度が高くなっていた。創造性についてはA市よりB市の方が高い傾向があった( $0.05 < p < 0.1$ )。不安についてはA市よりB市の方が高くなっていた( $p < 0.05$ )。放課後児童クラブや児童館利用頻度については、有意差は認められなかった。外遊びが好きかという項目については協調性に有意差があり( $p < 0.01$ )、「とても好き」と答えた人が「好きではない」と答えた人より高くなっていた。相談については、協調性( $p < 0.05$ )や創造性( $p < 0.01$ )に有意差が認められた。協調性については相談を「する」と答えた人が「全くしない」と答えた人より高く( $p < 0.05$ )、創造性については、「あまりしない」と答えた人より「全くしない」と答えた人が高くなっていた( $p < 0.05$ )。重回帰分析の結果、協調性には創造性、児童館利用頻度、満足度が影響を与えていることが推察された(調整済みR2乗:0.305)。

#### 5. 考察

15年前に実施した調査<sup>2)</sup>と同様に本調査でも、外遊びが好きな子どもは協調性が高く、創造性や満足度も高い傾向にあることから、子どもにとって外遊びが重要であることが再確認された。児童館によく来る子どもは、職員によく相談しており、協調性や創造性が高くなっていることが明らかになった。今後、児童館の相談機能(ソーシャルワーク機能)の充実が求められる。地域差については、A市の方が児童館をよく利用しているが、満足度や創造性はB市の方が高くなっていた。A市はB市に比べ児童館の数が多いが、相談機能などより充実した活動が求められる。

#### 注

- 1) 本研究は、令和2年度~令和5年度科研・基盤研究(C)(一般)・課題番号20K02298「地域の児童館の子育て・子育て支援におけるソーシャルワークに関する実証的研究」(研究代表者:八重樫牧子、研究分担者:井上信次、直島克樹、三好年江、泉宗孝)の一部である。
- 2) 八重樫牧子(2011)「児童館を利用している子どもの社会性に関する調査研究」,福山市立大学開学記念論集編集委員会編『児童教育学を創る』児島書店,231-247。児童館利用効果(子どもの社会性)21項目のカテゴリカル因子分析を行った結果、項目1、3、4、8を除く17項目から、協調性と創造性の2因子が抽出された。